

ットリヒが我々にはあまり嚴格過ぎるといふのが原因の主なことで、明日行はれる演奏會を流會にしてやらうと前日申合せた。ところが下級生の一人、今は故人となつた田村虎藏が學校へ注進に及んだため遂に事がばれて、元橋義敦他三名の男生徒が十五週間の停學處分をうけた⁽¹⁾。しかし間もなく赦されたと聞く。これは故島崎赤太郎教授が故岡野貞一教授に語られたのを、更にまた私が密かに聞き出した話である。元橋義敦は翌二十六年本科専修部を總代で卒業した秀才であつた。昭和二十年五月一日、疎開先秋田縣下で七十七才で世を去つた。今は皆故人となつたので、藝術家らしい無邪氣なストライキの真相を明にしてディットリヒの思ひ出を終る。〔昭和十七年〕

(1) この件に関する詳細な事情は北村季晴(ディットリヒの弟子の一人)の『洋楽回顧録』に述べられている(『月刊楽譜』第九卷第十一号、大正九年十一月)。

ディットリヒの帰国以後、東京音楽学校は高等師範学校附属から再び独立し、日本の新しい音楽文化を背負つていっその内容充実をはかった。教師陣は、それまでの初歩的な教師像を脱して世間の評価をもつ演奏家という人材で構成されるようになった。三十年代以降の校長は渡邊龍聖、大島義修、高嶺秀夫、湯原元一と目まぐるしく変つた。だが行政手腕のある彼らの指導により小山作之助をはじめ、海外留学で研鑽を積んだ幸田延(アメリカおよびオーストリアへ留学)、島崎赤太郎(ドイツ留学)、安藤幸子(オーストリアへ留学)、神戸絢(フランス留学)らが、すぐれた技術をもつ外国人教師たちとともに、まさに躍進の時代といえる活発な音楽学校を築いた。瀧廉太郎、山田耕筰、信時潔、柳かねらがこの時代に巣立っていった。次に紹介する外国人教師は、この輝かしい時代を導き担った人々である⁽¹⁾。

(1) 今回『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第一卷は明治時代に任期

満了となつた外国人教師に限つた。したがって明治時代に雇入れた教師でも大正時代にわかつて活躍する教師は次の第二巻で紹介することにした。

(二) ラファエル・フォン・ケーベル Raphael von Koebel
(一八四八〜一九三三)

在職期間 明治三十一年〜四十二年(一八九八〜一九〇九)
嘱託講師

担当科目 ピアノ

明治三十一年五月ケーベル博士が東京音楽学校へ出向しはじめた頃はまだ高等師範学校附属音楽学校であつたが、翌三十二年には再独立した。彼は左記の履歴で明らかのように、ピアニストで哲学博士の学位をもつている。明治二十六年六月に、東京帝国大学からの招聘に応じて備外国人教師という身分で来日した。東京帝国大学における主な講義は、哲学概論、西洋哲学史およびカント、ヘーゲルなどで、ほかにゲーテの『ファウスト』、詩学などの特殊講義受け持った。だが特に熱を入れたのは契約外のギリシヤ語の文法や初歩を教える時間であつた。この授業で彼はプラトン、ホメロス、アイスキュロス、オヴィディウス、ホラティウス、ヴェルギリウスなどの講義を行った。東京音楽学校へはどのような経緯で出向するようになったのか、手続上の書類というものが一切見当たらないので明らかではないが、おそらく東京音楽学校側からの要請で東京大学との兼務を文部省が許可したものと思われる。ケーベル博士は、東京帝国大学で哲学の講義をするかたわら、ディットリヒをはじめ音楽関係者とピアニストとしての交流が深く、彼の音楽的芸術性は高い評価を得ていた。履歴によると彼は幼い頃ピアニストを志していた。

ケーベル博士の履歴(来日まで)

東京音楽学校には履歴書が提出されなかつたので、久保勉訳編『ケーベル博士隨筆集』(岩波文庫33-641-1)から紹介する。

一八四八年一月十五日ヴォルガ河畔、ニシュニイ・ノヴゴロツトに生れる。父は枢密顧問官、ドイツ系ロシア人。すぐに母を亡くし、母方の祖母の家に引き取られた。祖母の慈愛深く、高雅で自由な精神、稀にみる豊かな教養は彼の人間形成に大きな影響を与えた。ピアノの手解きも堪能であった祖母から受ける。

一八六七年、十九歳、モスクワ音楽院に入学、ピアノを専修する。チャイコフスキ、ニコライ・ルービンシュタイン、クリンドウオルトに師事。

一八七二年、音楽院を優秀な成績で卒業。

内気な性格は音楽家の道を歩まず、生涯の方針を学問研究に向けた。

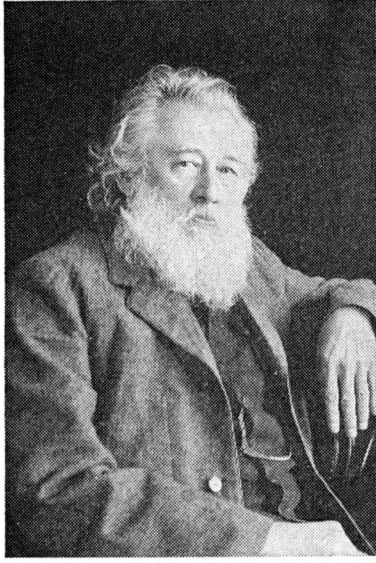
一八七三年、ドイツへ赴き、イエーナ大学で自然科学者エルンスト・ヘッケルの講義を受ける。

一八七六年、ハイデルベルク大学に入り、哲学史家クーノー・フィッシャーに師事。

一八八二年、シヨーペンハウアーの人間自由に関する論文で学位を取得。

一八八三年、カールスルーエ音楽学校の教師となり、ピアノ、和声学、音楽史、および音楽美学の講義を担当。だが校長と意見が合わず一年間で辞職。

一八八四年、ミュンヘンに移り、約十年間この地に留まって哲学書を著述する。



ケーベル博士

一八九三年四月三十日、身の廻りの世話をさせるための一人の少年ストラッサーを伴い日本に向けヨーロッパを離れる。六月十一日神戸に着。

爾来、東京大学と七度契約を更新し、二十一年間一度の休暇をとることもなく教壇に立ち続けた。この間の十一年間が東京音楽学校との兼務であった。またケーベル博士はピアノ教授のほか哲学的音楽論に基づく音楽史の講義も行った。東京芸術大学付属図書館にはその講義録訳稿（訳者不明）「西洋音楽史稿其一古代及希臘音楽史完」が残っている。非常に含蓄のある講義の序に当る箇所から一部分を紹介しよう。この中で博士はどんなによく機械的に指が動いても「音楽ニ於ケル論理上ノ思想ニシテ発達スルナクンバ諸君ハ決シテ音楽家ニ非ス否音楽家ト云フ能ハサルナリ」と警告している。

吾ガ是ヨリ述ベントスル講義ノ主題ハ音楽ノ歴史ニシテ諸君ハ宜シク音楽ノ理論ト混同スベカラズ、音楽ノ理論ハ言語ニ於ケル文典修辞学等ノ諸学ニ比スベキモノニシテ要スルニ音楽ノ理論ハ音楽テフ普通語ニ於ケル吾人ノ觀念ヲ一定不変ノ規則ニ従テ正シク且ツ美シク叙述スルノ術ヲ云フナリ、蓋シ音楽ハ一ノ言語ニ外ナラズ所謂音語 (Tonsprach) ニシテ其規則ヤ亦文典ノ規則ノ如ク極メテ精緻ナルモノニ属ス此故ニ或ハ音楽的文章論ト云ヒ或ハ音楽論理学ト云ヒ若シクハ音楽的修辞学ト云フガ如キ表言法ヲ用ユルモ敢テ不當ト云フベカラス否吾人ハ此ノ如ク云ヒテ決シテ是等ノ語意ニ戻ル事ナキヲ得ルノミナラズ又実ル云ハサルヲ得サルナリ諸君願クハ是ヲ忘ル勿レ殊ニ其音楽的論理学及修辞学ナルモノト存スルハ疑フベカラズシテ以テ音楽上ノ作曲及演奏ニ於テ応用遵守スベキ之、好シ諸君指頭ノ運用如何ニ速カニシテ器械的熟練ノ如何ニ大ナルモノアリト

スルモ諸君ノ音楽ニ於ケル論理上ノ思想ニシテ発達スルナクンバ諸君ハ決シテ音楽家ニ非ス否音楽家ト云フ能ハサルナリ、吾人ハ此講義中ニ於テ屢理論上ノ事柄ニ就テ述ル事アルベシト雖トモコハ音楽論ニ於テ叙スルノ法トハ自ラ異ルモノアルヲ知ラサルベカラズ、音楽論ハ音楽ノ法則ヲ既定ノモノトシテ考察ス即歴史ノ或一時代ニ於テ一度確立セルモノトシテ考察スルモノニシテ其過去ニ於テ如何様ニ形成発達セルカハ全ク措テ問ハサルナリ然ルニ音楽史ハ常々恰モ其発達ヲ吟味セントス、音楽論ノ生命ハ文典ノ如ク單ニ現在ニ住ス音楽ノ歴史ハ多ク過去ニ住シ過去ニヨリテ現在ヲ説明セントス、此故ニ音楽論ハ音楽史ノ極メテ僅少ナル章ヲ充スモノ一例ヲ挙テ是ヲ説明センカ吾見在ノ音楽ハ諸君モ知ルガ如ク第三音ト称スル音程インクワイゼヲ諧音コンコード(協音コンソナント)トシテ考察スルナリ、吾音楽ノ完成スルヲ得タルハ全ク此故ニシテ所謂和声ハーモニー及対位コントラポントテフ複雑ナル学ノ確立亦是ニ因ル、而レトモ音楽史ニヨレバ現在ノ音楽ヨリ以前ニ在テハ此音程ハ諧音ノ意義ヲ有セサリキ否十六世紀ノ頃パレストリナノ時代ニ於テモ音楽ノ一曲ヲ終ルニ十分ナル和絃コード(第三音)ヲ以テスルハ未タ普通ニ用キラレサリシナリ茲ニ知ル第三音ヲ以テ諧音トシテ取扱フハ即チ是音楽論上ノ事ニシテ彼第三音ヲ以テ不協音トスルノ謬見ヲ永ク維持シテヨリ遂ニ今日ノ見解ニ達セルマデ其如何ニシテ又何時ヨリ此ク変遷シ来リタルカヲ問フハ即是音楽家ノ研究事項ニ属ス、從テ此講義ニ於ケル吾人ノ問題ヤ亦最古ノ時代ヨリ現代ニ至ル音楽ノ発達テフ事ナラサルベカラズ吾人ハ則チ其凡テノ方面ヨリ音楽ヲ吟味セントスルナリ今便宜ノ為メ吾ガ述ベントスル事柄ノ順序ヲ少シク變更セントス

東洋ノ音楽ニ就テハ云フ所極メテ少シ是レ吾ガ能ハサル所ニシテ好シ又能フベシトスルモ其吟味ニ対シテ多クノ時間ヲ費スヲ好マズ蓋シ東洋ノ音楽ハ僅少ヲ除クノ外ハ西洋ノ音楽ニ何等ノ關係ヲ有スル事ナク又何等ノ影響ヲ及ボサレバナリ而モ時ニ尚云フ所ナキニ非ルベシ、古代希臘ノ音楽ニ在テハ全ク是ト異リ其音楽論上ノ方面ハ殆ント云フニ足ルモノナシト雖トモ吾人ハ全ク是ヲ看過スル能ハサルナリ否音楽トハ密接ノ關係アリト称セラル、吾近世劇ノ発達ハ実ニ希臘劇ノ知識ナクシテハ殆ント理解シ能ハサルナリ思フニ希臘及羅馬ノ教育歴史藝術及宗教神話ノ知識ハ諸君音楽家ニ必要トスル所ニシテ又実ニ学ヒ難キ事ニ非ス、元来近代ノ音楽家タルモノハ十分ノ素養ヲ要ス而シテ実ニ諸君ハ其文学歴史美学等ノ素養ヲ積ムニ從ヒ諸君ノ技術(音楽)ノ進歩ニ貢獻スル必スヤ大ナルモノアルベキナリ、彼十八世紀ノ独逸ノ学者リヒテンベルヒガ神学ニ関シテ云ヘルノ言ハ又移シテ藝術及音楽ニ云フヲ得ベキナリ彼曰ヘラク唯化学ノミヲ知レル人ハ未タ化学ヲ知ルモノト云フ可ラスト吾ハ將ニ云ハントス單ニ音楽家タルノ人ハ未タ音楽家テフ名称ノ値セズト是決シテ誇大ノ言ニ非ス思フニ美学的教育即チ美学及藝術史ノ知識ノ音楽家ニ必要ナルハ明々白々ニシテ音管ニ音楽ガ一ノ藝術タルノ故ヲ以テ然ルノミナラス又音管ニ一般藝術ノ如何ナルモノナルカヲ知ラズンバ音楽テフ藝術ヲ理解スル能ハサルノミナラズ実ニアラユル藝術ハ最も密接ナル關係ヲ有シ其或者ニ至テハ殆ント互ニ離ス可ラサル連絡ヲ有スルガ故ナリ是ヲ例ヘバ樂戲ニ於ケル音楽ト詩トノ如シ樂劇ニ於テハ其「オペラ」ナルト「オラトリオ」ナルトヲ論セス常ニ歴史若クハ神話若クハ文学ト交渉スルナキヲ得ズ諸君ニシテオルフオイ

ス、アルミダ、アルセスト、イフイゲニア、等ノ何者ナルカヲ知ル
事ナクンバ如何ニシテ能クグルツクノ「オペラ」ヲ理解シ得ベキヤ
是等ハ皆希臘神話若クハ中世ノ傳説ニ属スルモノナレバナリアルミ
ダノ名ヲ云ヘバ諸君ハ必ズヤ伊太利ノ詩人タツソー及其詩エルサレ
ム回復ヲ想起セン已ニタツソーヲ知ル、彼ノ生活セル時代所謂文学
復興期及彼ガ文学上ニ於ケル位置影響亦諸君ノ知ルベキ所、否諸君
ニシテ現世紀ノ音楽例ヘバワグネルノ「オペラ」或ハリストノシシフオ合奏
曲ニカドボエム或ハシューマンノ音楽ヲ味フアラバ諸君ノ文学的素養ニ資ス
ル大ナルモノアルベキナリ現世紀ニ於ケル大ナル藝術家ハ概ネ高等
ナル教育アル人ニシテ其或モノワグネル、ブロウノ如キニ至テハ学
者トシテ亦優ニ地歩ヲ占ムルモノ吾人ハ同シク此ノ如キ藝術家ニ私
淑セサルベカラズ、吾人ハ呉々モ諸君ニ一般ノ修養ヲ忘ルナキハ勿
論又語学殊ニ独逸語ヲ修ムベキヲ忠告セントス此ク如シテ始メテ音
楽及音楽家ニ関スル独逸書ヲ原文ノ儘読破スルヲ得ベケレバナリ
古代希臘ノ音楽ノ大體ヲ考察セル後吾人ハ直ニ基督教時代ノ音楽ニ
入ルベシ而シテ茲ニ彼音楽ノ三種即声楽器樂及複合樂ニ就テ述ルア
ラントス余ハ又大作曲家ノ簡單ナル傳記ヲ附加シ諸君ノ参考トシテ
資スルニ足ルベキ音楽ノ書名ヲ挙グベキナリ之レ吾人講義ノ大綱ナ
リトス

然レドモ吾人ハ音楽史ヲ始ムルニ當リ先ツ要用ナル先決問題ヲ決
セサルベカラズ即チ吾人ハ是ヨリ研究セントスル音楽史ノ対象タル
モノ、性質及其対象ヲ理解セズシテ是ガ歴史ヲ云フモ何等ノ興味ナ
カルベケレバナリ吾人ハ先其対象ハ如何ナル種類ノモノカヲ知ラサ
ルベカラズ換言スレバ吾人ノ先決問題ハ音楽トハ何ソヤ是ナリ、音

楽ハ一ノ藝術ナリト云フ亦一ノ答案タルベシ而モ此ハ「ピヤノ」ト
ハ何ゾヤノ問ニ答フルニピアノハ一ノ楽器ナリト云フカ如キモノニ
シテ未タ充分ノ答案トスルニ足ラズ、音楽ノ特性ヲ説明センガ為メ
ニハ音楽ガ凡テノ藝術中ニ於テ如何ナル位置ヲ占ムベキカ又如何ナ
ル点ニ於テ他ノ藝術ヨリ異ルカヲ理解セサルベカラズ而ルニ此問ニ
答ントセバ吾人ハ先ツ一般ニ藝術トハ如何ナルモノナルカヲ知了ス
ルヲ要ス而シテ此藝術一般ノ性質及各藝術ノ性質ヲ説明スルハ恰モ
是美学テフ科学ノ重ナル事業ニ属スルモノトス、吾人ハ今永タラシ
キ難問ニ入ルヲ止メ暫ク所謂藝術ノ如何ナルモノナルカヲ次ノ如ク
説明セントス、外界ノ自然並ニ人間内部ノ情緒生活ヲ支配スル隱微
不可見ノ勢力及法則ヲ可感的形式ニ表象スルモノ是ヲ藝術ト云フ、
即チ藝術ハ各科学ト同シク宇宙ト普遍的及個人的生活ヲ以テ其対象
トナスナリ、而レトモ藝術ノ与フル所ハ單ニ事物ノ奴隸的模倣ニ非
スシテ事物ノ理想ニ在リ即チ凡テノ偶有性ヲ離レタル自然人類、個
人ノ常住不變の眞髓ニ在ルナリ

蓋シ最高等ナル生活ノ形式ハ吾人内界ノ精神的生活ニ在リ感情思
想之全範圍ニ在リ一言以テ是ヲ云ヘバ人間ガ動物ト異ル所ノ人生獨
得ノ境界ニ在ルナリ故ニ藝術ニシテ此境界ヲ表象スル事多ケレバ多
キ程益高等ナル藝術ヲナスモノニシテ彼世ニ造形藝術ト称スル建築
彫刻繪画ノ如キハ單ニ人生ヲ標示スルニ過キスシテ未ダ是ヲ實現ス
ルニ足ラズ何トナレバ是等ノ藝術ハ眞ノ運動ヲ表象スル能ハサレバ
ナリ從テ情緒ノ如キ動的現象ニ至テハ元ヨリ是ヲ表象スルニ由ナキ
ナリ人生ト其運動ヲ表ハスニ是ヲ寫象的ニセズシテ能ク現象的ナル
ヲ得ルハ音楽ニ至テ始メテ是アルモノニシテ是レ音楽ノ材料及対象

ガ音楽及情緒的生活テフ動的現象ナルガ故ナリ

詩ニ至テハ人生ヲ表ハスノ尚豊富ナル事音楽ニ勝ル事一層ナルハ言ヲ俟タズ、アラユル方面ヨリ自然ト人生トヲ表象スルヲ得べく、何等ノ制限ヲ有セズシテアラユル事物ヲ云ヒ表ハスヲ得べく、又凡テ他ノ藝術ノナス所ヲ模倣スルヲ得ベケレバナリ詩ガ果シテ此ノ如ク他ノ藝術ト対峙シテ模倣ヲ以テ事トナスベキカ否ハ全ク別ノ問題ニ属スルモ而モ詩ノ此ノ如キ記述ノ能力アルハ事実ナリトス、音楽ニ至テハ然ラズ音楽ハ制限ヲ有ス唯吾人ノ情緒ニ就テ語ルヲ得ベキノミ而モ此点ニ於テハ詩ト雖トモ決シテ是ト比肩スル能ハサルナリ何トナレバ詩ノ材ハ語ナリ而シテ語ヤ其性質上常ニ自ラ明晰ナルヲ以テ感覺若クハ情緒ノ如キ明晰ナラサルモノヲ云ヒ表ハスニ於テ適切ナル能ハサルモノアレバナリ、又詩ハ單一ノ事項ト普遍ノ事項トヲ共ニ云ヒ表ハスヲ得ルモ音楽ノ表ハス所ハ徹頭徹尾普遍的ニシテ所謂抽象的ナルヲ免レズ即音楽ハ実ニ歡喜幽鬱眷怠等ノ如キアラユル感情ヲ充分ニ表ハスヲ得ルモ唯是最モ一般ノ抽象的状态ヲ表ハスニ過ギスシテ情緒―特殊ノ場合ハ是ヲ表ハス能ハズ彼恋愛ノ如キハ音楽ニ於テ屢々好ク表ハサレタル感情ナレトモ其特殊ノ場合例ヘバロメオジュリエットノ恋愛ヲ表ハサントスルガ如キニ至テハ徒勞ノミ、勿論吾人ガ茲ニ述ル所専ラ無言ノ器樂ニ関スト雖トモ是ヲ声樂ニ見シカ声樂ハ元来本文^{テクニスト}ヲ加ヘテ凡テ云ヒ表ハスヲ得ルモノ、而レドモ亦單特ノ場合ヲ表ハス所ノ樂ニ非ズ、是ヲ表ハスハ唯夫レ詩アルノミ、器樂ノ曲屢フアウストマンフレッドハムレットリリア等ノ曲名ヲ附スルモノアリ而シテ聴者亦恰モ是等詩中ノ人物ノ精神界ニ同情ヲ表シ曲中ニ表ハレタル如キ幻像ヲ換起スベシト雖トモコハ是

レ明カニ一ノ幻像ニ過キズ若シ初メヨリ其曲名ヲ知ラズシテ其曲ヲ聞カバ直チニ其然ルヲ知ラン唯吾人ノ確カニ知り得ル所ハ幽鬱憂愁熱情諾クハ歡喜詠諧清新等ノ音楽ノ特色ニ在リ其感情ガ果シテ其曲名ノ人物ノ感情ナルカ否カハ聴者元ヨリ認ムルニ由ナキナリ故ニ純粹ナル音楽ハ唯其言ノ樂ノミ何トナレバ語ヤ將タ詩ヤ是ヲ樂ニ附加シテ如何ニ好ク音楽ニ統合スルトモ畢竟スルニ印象ノ統一ヲ乱ス所ノ外的元素ニ過キサレバナリ

関声ハ亦一ノ樂器トシテ考フルヲ得ベシ乃チ樂器ハ茲ニ天然ノ樂器(人声)及人為ノ樂器ノ二大種ト兩者ヲ統合セル者トヲ併セテ三大種類ニ區別スルヲ得ベシ声樂器樂及混合樂是ナリ

現今ニ於ケル音楽ノ三要素ハ節奏、旋律、和声、是ニシテ各者序ヲ追フテ歴史的ニ發達シ来リタルモノトス

なお、ケーベル博士には古代ギリシャの音楽に関して「希臘古代の詩歌及音楽」(『帝國文學』第一卷十号および第二卷二号、明治二十八(九年)と)という論文がある。

博士はモスクワ音楽院を卒業したのち「公衆の前での演奏に対して、私は昔から押えきれぬ嫌悪を感じるのであった」(『ケーベル博士隨筆集』二〇四頁)として全く度を失わしめるのであった(『ケーベル博士隨筆集』二〇四頁)と語って演奏家の道を選捨てしまったのだが、東京音楽学校の演奏会や慈善演奏会には快く出演した(ディットリヒの項参照)。

当時のわが国では博士以上のピアニストを求めることはできなかった。演奏会評をみるといづれも彼の崇高な演奏に最大の賛辞を送っている。社交ぎらいで控え目な博士は、日本の聴衆の前には輝かしい存在だったのである。

次の記事は博士が明治二十八年の春に出演した二度の音楽会に対する

批評である。

今春演奏會の先驅となりしものは去三月下旬本郷中央會堂に於ける慈善音樂會にして、久しく露國宮廷附屬音樂學校に遊びて、去秋歸朝せし金須嘉之進氏が『ヴィオリン』獨奏を聴き、其弓を使用する事自在にして雄健なるに敬服し、ドクトル、ケエベル氏が故人ルウビンスタインの情熱燃ゆるが如き妙曲を彈し、又リストが作曲に係る魯國民謠鶯の歌の『プリアシオン』を奏せしを耳にして、特に後者に弱音の彈奏極めて妙なりしを感じぬ。其後幾くもなくして音樂學校學友會の演奏ある可しとの噂しきりにありしが、終に其事なくして已みしは遺憾なりき。月を踰へて數日同校樂堂に「トニック、ソルファ」の音樂會ありしも、別に評する程の演奏ありしにあらざ、在濱西人の兒童等が温習會のみ、又美土代町青年會館に二三の音樂會ありしと雖も、これ亦西樂界を動す程の勢力なかりき。

然るに先月十八日〔明治二十八年五月十八日〕の夜該館に催されたる演奏會は臨時大音樂會といふ名を以て、近時樂界知名の士に依頼し、從來の規模を擴げて好樂の士女が來聽を招ぎぬ。横濱市中音樂隊のウウヰエルテウル序歌樂を以て始まり、逐次曲目を逐て演奏ありし内、樂隊は案外巧なりしが、樂場の構造此種の樂に適せず、四壁に反響して耳を聳する許り、荻岡社中の三曲『小督』とは簡易なるものを選ばれしが、松柯氏が美音妙手流石箏曲社會の流行兒たり。カアデナ嬢のシヨパンは幽麗なれども短に失す。ブロックサム嬢の獨吟花の歌といふは蓋しグウノオの樂劇『ハウス』中の唱歌なるべし。歌詞伊太利語ときゝしは僻耳なりしか、マルゲリイタと呼ぶ聲の優雅なるは去

年忍岡樂堂の『オペラ』以來に聴きし美音にして、當夜は殊に音量ひろく、聲澄みて艶麗なる事平生に倍せしは、ケエベル氏が伴奏の巧妙なるに依りてならむも、元來素養ある人にあらずして誰れか能く爲すべき。其他荒木古童氏の尺八は殘月といひて幽婉なる獨奏、殊に三絃の老手なるに感ず。ケエベル氏が洋琴はリストの『リゴレット』にして半音階の上下目覺しき彈奏なりき。斷切音の奇哨なるは云ふも更なり、『ペダル』を以て音の高低を調へ、全線盡く用を爲さざる事なきに至りては、啞然自失して評語を加ふる能はず。實に樂の美は感ずべくして語る可からず寫して文に録せむとするも、徒らに諧音の交錯呼吸の妙致を賞して、一般の感情を顯はす形容詞を列記するのみ。されば樂界の消息を傳へむとする者は終に其意の一半を叙するに過ぎざるなり。

(1) 『帝國文學』第一卷六号、明治二十八年)

(1) マダム・ビートルリス・ブロックサム嬢はイギリス人声樂家で、公使館關係の婦人であつたようである。東京音樂學校には明治二十七年十月から翌年七月まで声樂教師としてつとめた。ケーベル博士らとたびたび慈善音樂會に出演している。

(2) 明治二十七年十一月二十四日、東京音樂學校の奏樂堂において、グノーの歌劇「ハウス」第一幕が在日外国人によつて上演された。その際ブロックサム婦人はマルガリーテの役で出演した。『テノル』と『バリトン』の間に亘り音量充大にして且つ勇健、極めて美しき聽にあらざれども一種の情熱を具へて『夜は更けぬ』Tardiciaといふ歌の意よく聽取られたり。ブロックサム嬢の技術は既に鹿鳴館にて聴きたる如く優麗にして正確なること實に其苦學を想はしむ。然れども難を云はゞ量乏しく力足らず、小室會合の樂に適すれども樂劇奏堂の聲にあらず、織麗可憐の音と謂ふ可し(『帝國文學』第一卷一号、明治二十八年)という評が残っている。

本校に保存されているケーベル博士出演の音樂會プログラムは東京音

Concert

FOR THE BENEFIT

OF THE

Charity Kindergarten

AND

Gio-sei-en Orphanage.

UNDER THE DISTINGUISHED PATRONAGE OF

PRINCESS KONOYE,
 SIR ERNEST SATOW, VISCOUNT AND VISCOUNTESS AOKI,
 COUNT ORFEDI, VISCOUNTESS OKABE,
 COL. AND MRS. BUCK, BARONESS IWASAKI.

SATURDAY, MARCH 19TH. 2 P.M.

IN THE

MUSIC HALL

OF

THE ACADEMY OF MUSIC,

UYENO, TOKYO.

明治三十一年三月十九日(土曜日)午後二時開會
 上野公園地音楽學校奏樂堂に於て

慈善音樂會演奏曲目

贊 成 諸 君
 (順はろい)
 男爵 岩崎 令夫人
 米國公使 バック 閣下
 同 伊國公使 オルフェニ 閣下
 子爵 近衛 令夫人
 公爵 青木 周藏 閣下
 同 英國公使 サトウ 閣下

慈善幼稚園
 育兒曉星園

明治31年3月19日奏樂堂における慈善音楽会のプログラムの表紙

楽学校関係のものに限られ、それ以外の主催のものはほとんど見あたらない。第二次資料からも得ることのできなかつた次の貴重なプログラムを今回の百年史の企画のために児童文学研究家の上笙一郎氏が提供して下さった。明治三十一年三月十九日奏樂堂における慈善音楽会のプログラムである。東京音楽学校の今井慶松助教および生徒有志も出演している。

演奏曲目

第一部

- 一、唱歌、四條巖……………音楽學校生徒諸氏
- 二、バイオリン獨奏……………ヤンカー氏
伴奏 エリス氏
九番コンサルト……………デ、ベリヲツト作曲
- 三、獨唱……………モリソン夫人
ヤンカー氏
- 四、ピアノ獨奏……………ケーベル氏
ソナタ……………ビートベン氏作曲
- 五、獨唱……………ガースト夫人
フレデリック、クリーフエ
- 六、バイオリン獨奏……………ヤンカー氏
伴奏 ケーベル氏
ソナタ……………ビートベン氏作曲
- 七、能狂言……………三宅惣三郎氏
鞆猿 外諸氏

第二部

- 一、琴 春の曲……………同 今井慶松氏
- 二、獨唱……………モリソン夫人
- 三、ピアノ獨奏……………エリス氏
ロンド、カプリシヲソ……………メンデルシヨン氏作曲
- 四、三曲、越後獅子……………同 今井慶松氏
三弦 町田杉勢子
胡弓 山室保嘉氏
- 五、バイオリン獨奏……………ヤンカー氏
伴奏 エリス氏
甲 ローマンス……………ルービンスタイン氏作曲
乙 ガボット……………ボン氏作曲
- 六、能狂言……………三宅惣三郎氏
六地藏 外諸氏
以上

PROGRAMME

PART I.

- 1. Chorus.
Pupils of the Musical Academy.
- 2. Violin Solo. Ninth Concerto ……………De Bériot.
Mr. Junker and Mr. Ellis.

3. Vocal Solo with Violin Obligato, Serenade, Gounod.
Mrs. Mollison and Mr. Junker.
4. Piano Solo. Sonata*Beethoven.*
Dr. von Koerber
5. Vocal Solo. "WHEN?"*Frederic Cliffe.*
Mrs. Garst.
6. Violin Solo. Sonata*Beethoven.*
Mr. Junker and Dr. von Koerber.
7. "No-Kyogen."

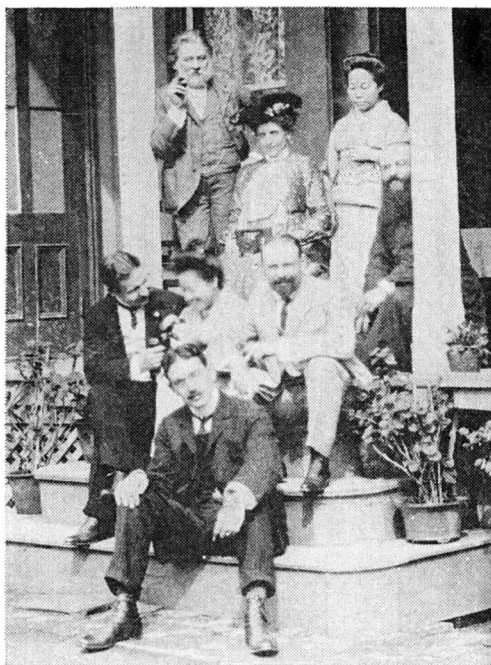
PART II.

1. Japanese Music.
2. Vocal Solo.
Mrs. Mollison.
3. Piano Solo. Rondo Capriccioso.....*Mendelssohn.*
Mr. Ellis.
4. Japanese Music.
5. Violin Solo. { *a.* Romance*Rubinstein.*
 b. Gavotte*Bohm.*
Mr. Junker and Mr. Ellis.
6. "No-Kyogen."

独身であったケーベル博士の家族は、ドイツから同行したストラッサー少年（彼は銃で自殺してしまう）と猫と犬と鶏であった。博士は「私の胸に描ける理想的生活とは」という自問に次のように答えている。「一般世間およびいわゆる『上流』社会から離れた生活、きわめて控目な確実な収入、精神的労作に従事しかつどうにかして他人のために用を足すだけのかんりの健康、善良で単純で、平静でその上教養ある人たちより成れる知友のきわめて小さい仲間、自宅においては同時に私の友だちで

もあるような忠実なる伴侶と助手、きわめて多数の家畜、とくに犬と猫と鶏と——『朝の喇叭』ともいふべき雄鶏のいない家には私は生きて行けない——」と（前掲『ケーベル博士隨筆集』二十五頁）。「利己心の混入を免れざる恋愛よりも真の友情」（久保勉氏の言葉）というケーベル博士の愛の形は、物言わぬ動物に対しても同じ友情で接することができた。東京帝国大学や東京音楽学校の仕事から帰宅すると夕暮のひとときピアノを弾くことが日課であった。駿河台のケーベル邸（東京市神田区鈴木町十九番地）の塀の外でそっと聞き耳をたてる若い崇拜者の姿が幾人もあったということである。彼にとつて音楽は「魂の言葉」でありピアノ演奏は他人に聞かせるものではなく、純粹に自分だけの心の対話であった。好んで弾いたのはベートーヴェン、ブラームス、シューマンなど、時々いたずらに日本の新内流しや端唄、小唄、長唄、琴曲をテーマに即興演奏して打ち興ずることもあったそうである（大沼魯夫「音楽家としてのケーベル博士の思出」『學校音楽』第四卷六号、昭和十一年より）。

ケーベルの人格について久保勉氏は「先生はじつにゲートルが『地上の子の最高の幸福』と呼んだところのもの、即ち人格であったのである。



中央列の中央幸田幸、後列の左ケーベル博士、ひとりおいて幸田延、右端かがんでいるのはノエル・ペリー



前列右から幸田幸、ベッツォルト、幸田延、後列右から
ヴェルクマイスター、ケーベル

この人格は一見『自然』の所産のような観を呈したけれども、また先生の天稟はたしかに非凡であったけれども、やはり全生涯にわたる絶えざる努力精進の結果と言わなければならぬであろう。実際先生は晩年に至るまで常に自分の内面的現情に満足するようなことなく、終生謙虚な心をもって自分自身の陶冶修業と向上完成に、日ごとに新たな努力を怠らなかつた人である」と述べている(前掲『ケーベル博士随筆集』二十三頁)。

この人格は敬虔な信仰心と結びつき、彼を師と仰ぐ学生たちに、学問芸術以上に深い感銘ないしは影響を与えた。それは漱石に彼の有名な言葉「文科大学へ行って、此処で一番人格の高い教授は誰だと聞いたら、百人の学生が九十人迄は、数ある日本の教授の名を口にすると前に、まつフオン・ケーベルと答へるだろう」(岩波版『漱石全集』第十七巻、八十九頁)といわせたゆえんであった。

大正三年帝国大学との契約期限が切れ離日することになった。七月十

四日「露国人勲四等ラフェール・フォン・コエベル」に勲三等瑞宝章が贈られている。彼の国籍はロシアであったが、故国と決めたのはドイツであった。彼は自分の血が半分以上ドイツ人であることを自負し、自分の生いたちにロシア的文化の影響をほとんど受けていないことをむしろ誇りにも思っていた。ところが帰国のチャンス二度も逸してしまったのである。最初は第一次世界大戦勃発に遭遇し、四年後終戦を機に帰国しようとした二度目は、ロシア国籍のためドイツ入国にはロシア本国の許可が必要であるという理由からまた阻まれてしまった。

この間横浜の露国総領事館内に住いを移し、帰国の日を待っていたが、その後帰国を断念し日本永住を決意した。東京帝国大学を退職して九年後、大正十二年六月十四日動脈硬化症のため七十五歳の生涯を閉じた。遺骨は遺言にしたがって東京雑司ヶ谷の外人墓地に葬られた。この年の八月に発行された雑誌『思想』(岩波書店)は「ケーベル先生追悼號」となった。この中にケーベル博士の弟子であった橘絲重が「思い出」を寄稿しているのがその一部を左に掲載する。

橘絲重は明治六年(一八七三)十月十八日、三重県鈴鹿郡龜山(旧龜山藩、士族)に生れ、女子高等師範学校附属女児小学校を経て、明治二十一年東京音楽学校に入学した。二十五年七月卒業、同時に研究生となり授業補助を申し付けられた。二十九年高等師範学校附属音楽学校助教となる。彼女は幼い頃から英語とドイツ語を特別に学んでいたため、音楽を介して外国人との交際も広がった。ゆえにケーベル博士を迎え入れるかげの力ともなったようである。ケーベル博士が着任してからは同僚、時には弟子として、演奏に教育に尽力した。島崎藤村のピアノの師としても有名である。明治三十四年東京音楽学校教授となり昭和三年まで在職、その後は十四年九月一日に亡くなるまで時間講師をつとめた。

大正三年八月八日のこと、先生が東京をお立ちになる前日の夕方、先生のお宅の食堂に私も坐つて居た。それまで毎日色々な人の訪問でかなりおせはしい事であつたのを今日はもうそれらもすんで

まことに静かな晩餐である。この食卓は先生が日本へいらした其當時から先生におつかへ申してゐたのだといふ。先生は何でも古いものゝ事を「ぢぢ」と仰るのでこの食卓の事も「ぢぢテーブル」と仰る。此ぢぢテーブルの上では先生の學生さん達が色々先生との貴いお話を伺ひつゝしばしば御ちさうになつたのである。或時はその下で先生の可愛がついていらつしやる猫までが小さいお皿へ同じ御ちさうを分けていたゞいて居た。私はこの由緒ある食卓へ先生と共に坐つた最後の者である事を有がたく思ふ。先生は今夜はもう最終の東京の夜であるから機嫌よくしてゐよと仰られる。何くれとかはるこ

となくお話をして下さるのをともすれば一ぱいになる胸をおさへて伺つて居る（十二日の横濱御出發のびてまだしばらくお目にかかる事が出来やうとは其時誰が思ひかけやう）。それから稽古をするのによい曲や讀むのによい本などを色々教へて下さる。さまざま御馳走をいたゞいたあと、特にこしらへさせて下さつたアイスクリームや、久保様がむいて下さる水蜜桃を葡萄酒にひたしていたゞいたりした。

この夜はまだ少しおかたづけものなどが残つておいでなのであまり長くおさまたげしてはおわるからうとそろゝ立つ。先生はいつものとほりにして別れやうと仰る。私もやうゝごきげんようだけをまをし上げた。御門へまがる處でふりかへつたらば、お玄關の處にまだ見送つてゐて下さつた先生のお姿が電燈の下に大きくにじんで見えた。夏の宵とはいへ駿河臺はひっそりしてゐた。なつかしくかなしい思ひにふけりつゝゆくにふさはしい夜であつた。

或時先生が「此頃は何を弾いてゐるか」とおきゝになつた。私

は「私のはシュペーレンでなくアルバイテンで御座います。ベートーベンのソナタで御座いますが」といふ。先生はお笑ひになつて「アルバイテンならばまだよい。ツアンケンでなければ」と仰つた。なるほどピアノに喧嘩をふきかけて居る様なや、ピアノと組打ちでもしてゐる様なや——一寸をかしくなる。

或時、私が「東京は横濱よりさむい様で御座います。何もかもこほります」といつたら、先生は「さうかい。それでは音楽もこほるかい」と仰られた。

〔追記〕三点の写真は、神田、月刊『本の街』の編集者中西隆紀氏の紹介で久保勉氏の未亡人久保いと氏から提供していただいた。また、中西氏によるケーベル博士関係の詳細な資料研究からは大変に負うところが多かった。それは月刊『本の街』七十号と七十六号（昭和六十一年と六十二年）に連載されている。

(三) アウグスト・ユンケル August Junker (一八七〇—一九四四)

在職期間 明治三十二年～四十五年（一八九九～一九一〇）

お雇外国人教師

担当科目 管絃樂、実技一般

履歴（要約）

一八七〇年一月二十七日、ドイツのチュヒェン〔Tüchen 上部東ドイツ〕で生れる。

一八七六年、父からヴァイオリンの手ほどきを受ける。

一八八一年、ケルン音楽院に入学、ケーニゲオーおよびホルンデル教授に師事。

一八八七年、ケルン音楽院卒業。在学中成績優秀につきヴァイオリンの大